

2006

Impressions of standard Japanese and Osaka dialect

Stephen Bumstead
Edith Cowan University

Follow this and additional works at: https://ro.ecu.edu.au/theses_hons



Part of the [Other Languages, Societies, and Cultures Commons](#)

Abstract in English, text in Japanese

Recommended Citation

Bumstead, S. (2006). *Impressions of standard Japanese and Osaka dialect*. Edith Cowan University.
https://ro.ecu.edu.au/theses_hons/237

This Thesis is posted at Research Online.
https://ro.ecu.edu.au/theses_hons/237

Edith Cowan University

Copyright Warning

You may print or download ONE copy of this document for the purpose of your own research or study.

The University does not authorize you to copy, communicate or otherwise make available electronically to any other person any copyright material contained on this site.

You are reminded of the following:

- Copyright owners are entitled to take legal action against persons who infringe their copyright.
- A reproduction of material that is protected by copyright may be a copyright infringement. Where the reproduction of such material is done without attribution of authorship, with false attribution of authorship or the authorship is treated in a derogatory manner, this may be a breach of the author's moral rights contained in Part IX of the Copyright Act 1968 (Cth).
- Courts have the power to impose a wide range of civil and criminal sanctions for infringement of copyright, infringement of moral rights and other offences under the Copyright Act 1968 (Cth). Higher penalties may apply, and higher damages may be awarded, for offences and infringements involving the conversion of material into digital or electronic form.

USE OF THESIS

The Use of Thesis statement is not included in this version of the thesis.

標準語と大阪方言についての印象

Impressions of standard Japanese and Osaka dialect

バムステッド スティーブン

Stephen Bumstead

Bachelor of Arts (Language Studies) with Honours

EDITH COWAN UNIVERSITY
LIBRARY

Faculty of Community Services, Education and Social Sciences

15 December 2005

要旨

色々な国でスタンダードなことばとスタンダードでないことばに対する印象の研究が行われた(例えば Giles, Baker and Fielding 1975、Strongman and Woosley 1967、Cheyne 1970 等)。それらの研究では、スタンダードなことばで話した話者の社会的習性は高く評価されるのに対し、スタンダードでないことばで話した話者の連带的習性は高く評価される傾向があるという結果が報告されている。本研究は日本語のスタンダードなことばである標準語と地域方言の大阪方言に対する印象を調べて比較した。調査参加者は東京生まれ東京育ちの男女 5 人ずつと大阪生まれ大阪育ちの男女 5 人ずつで合計 20 人の日本人である。調査参加者はそれぞれ標準語と大阪方言で話された同じ内容の留守番電話の伝言を聞いて、その話者に関する色々な社会的習性と連带的習性を評価した。本研究においても他の研究と同じようにスタンダードなことば、つまり標準語で話した話者の社会的習性はより高く評価され、スタンダードでないことば、つまり大阪方言で話した話者の連带的習性はより高く評価された。

Abstract

In various countries there has been much research involving attitudes to standard and non-standard language (for example Giles, Baker and Fielding 1975, Strongman and Woosley 1967, Cheyne 1970), much of which has found a tendency to ascribe speakers of a standard dialect or accent with higher values in status traits such as intelligence, but lower values in solidarity traits such as sincerity, than speakers of a non-standard dialect or accent. The current research investigated and compared the attitudes towards standard Japanese and the Osaka dialect. The participants were 5 males and females born and raised in Tokyo and 5 males and females born and raised in Osaka. These participants heard an answering machine message of the same content in both standard Japanese and Osaka dialect and judged the speakers on various status and solidarity traits. Similar to previous research in the same field, the current research also found the speaker of a standard language in general, in this case standard Japanese, was perceived to possess higher status traits, but lower solidarity traits than the speaker of a regional dialect, in this case Osaka dialect.

I certify that this thesis does not, to the best of my knowledge and belief:

- (i) incorporate without acknowledgment any material previously submitted for a degree or diploma in any institution of higher education;
- (ii) contain any material previously published or written by another person except where due reference is made in the text; or
- (iii) contain any defamatory material



10 February 2006

Acknowledgements

この論文の作成にあたり的確なアドバイスと励ましを与えてくださった岩崎順子先生にこの場を借りて心からお礼を申し上げます。

目次

要旨	1
Abstract	2
Acknowledgements	4
目次	5
表リスト	6
図表リスト	6
第一章	7
はじめに	7
1.1 本研究の目的	8
1.2 先行研究	8
1.3 日本語の標準語と大阪方言	13
1.3.1 日本語の標準語の定義	13
1.3.2 標準語と大阪方言の特徴	15
1.4 日本人のことばのバラエティーに対する印象	16
1.4.1 日本人の日本語のバラエティーに対する印象	16
1.4.2 日本人の英語のバラエティーに対する印象	18
1.5 本研究	18
第二章	21
調査方法	21
2.1 調査の参加者	21
2.2 調査のデザイン	22
2.3 アンケートに使った評価スケール	23
2.4 調査手順に使った伝言の録音	25
2.5 話者	26
第三章	28
結果と考察	28
3.1 結果（1）－参加者全体の標準語話者と大阪方言話者に対する印象	28
3.2 結果（2）－参加者の出身別による標準語話者と大阪方言話者に対する 印象の相違	31
3.3 考察	35
第四章	39
終わりに	39
4.1 まとめ	39

4.2 本研究の問題点と今後の課題.....	40
参考文献	42
付録	45

表リスト

表 1 調査のデザイン	23
表 2 評価スケールに使われた習性.....	24

図表リスト

図表 1 参加者全体の標準語話者と大阪方言話者の社会的習性に対する印象.....	29
図表 2 参加者全体の標準語話者と大阪方言話者の連带的習性に対する印象.....	30
図表 3 大阪出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象.....	34
図表 4 東京出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象.....	35

第一章

はじめに

Giles, Baker and Fielding (1975) はイギリス英語の方言に対する人々の印象について調査し、同じ話者が同じ内容の話を産業都市のバーミンガムのアクセントで話した時より、イギリス英語の標準アクセントである容認発音で話した時の方が話者の社会的習性¹の「頭が良い」に対する評価が高かったと報告している。また、他の研究 (Strongman and Woosley 1967、Cheyne 1970) では容認発音話者は色々な社会的習性においてより高く評価され、地域方言話者は色々な連带的習性²においてより高く評価される傾向があるという結果が得られた。本研究は Giles 他 (1975) の研究を基にした、日本語における標準語と地域方言に対する人々の印象の研究である。

第一章ではまず本研究の目的を明らかにし、その後先行研究、特に Giles がイギリスで行った研究について詳しく述べる。次に日本語の標準語と大阪方言の定義、またそれぞれの特色を述べ、その後日本人のことばのバラエティーに対する印象について書き、最後に本研究の研究課題を明らかにしたい。

¹ この論文で「社会的習性」と言うのは筆者による「Status Traits」の訳である。

² この論文で「連带的習性」と言うのは筆者による「Solidarity Traits」の訳である。

1.1 本研究の目的

Giles 他（1975）の研究の目的はイギリスでよく知られている二つの英語アクセント（一つは容認発音でもう一つはバーミンガムアクセント）がそれらのアクセントで話さない人にどう評価されたかを調べて、比べることであった。調査の参加者は、その2つのアクセントで話す1人の話者がある仕事をするのに適切かどうかを評価するためのアンケートに答えた。

本研究の目的は Giles 他（1975）の研究のように日本の標準語と地域方言である大阪方言がそれらのアクセントで話す人と話さない人にどう評価されるかを調べて比較することであった。

1.2 先行研究

色々な国でことばに対する印象の研究が多数行われている。その中には本研究のようにある言語の標準語と標準でないことばに対する研究があるので、ここでいくつかの例を挙げる。その後、本研究が基にした Giles 他（1975）年に行われた研究について詳しく述べたいと思う。

1960 年に Lambert, Hodgson, Gardner and Fillenbaum はマッチト・ガイス・テクニッ

ク³（以下、MGT）を用いて、ケベック州でカナダ英語とカナダフランス語に対する人々の印象について調べた。つまり 4 人のバイリンガル話者がカナダ英語とカナダフランス語で同じ内容のスピーチをし、調査参加者にそれらの話者に対する印象を評価させたのである。カナダでは英語もフランス語も公用語と定められているが、研究が行われた翌年の 1961 年にはケベック州で英語を母国語とする人はわずか 1.6% しかいなかった（Lieberson 1970）。それにもかかわらず 14 項目のうち、英語を母国語とする 64 人の大学生の参加者に 10 の項目（例えば「頭が良い」、「信頼できる」など）でフランス語話者のほうが低く評価され、フランス語を母国語とする 66 人の大学生の参加者に 11 の項目（例えば「頭が良い」、「信頼できる」など）でフランス語話者の方が低く評価された。このことから当時のカナダ全体を見てもフランス語がマイナーな言語だとされており、逆にもう一つの公用語の英語はフランス語より多くの人に使われていて社会的に地位が高いと思われていた（Giles and Powesland 1975）ことがわかる。

オーストラリアでは Haig and Oliver（2002）が学校の教師のことばのバラエティーに対する印象を調べた。それぞれ社会経済的に高いとされている地域の小学校と高等学校一校ずつと社会経済的に低いとされている地域の小学校と高等学校一校ずつから 3 人ずつの教師が、これらの学校とは別の社会経済的に高いとされている地域の小学校と高等学校一校ずつと社会経済的に低いとされている地域の小学校

³ マッチト・ガイス・テクニクと言うのは「バイリンガル者の二言語を使用した場面から録音したテープを研究参加者に聞かせ、参加者はバイリンガル者の様々な面を評価する方法」（古屋、1999）である。

と高等学校一校ずつに通っていた四、七、九年生⁴の話しことばを評価した。

それぞれ小学校の教師が四年生と七年生の話しことばを評価し、高等学校の教師が七年生と九年生を評価した。この研究でもオーストラリアでスタンダードとされていることばを多く使っていた社会経済的に高い地域の生徒の方が高く評価されたという結果を得ている。

他に、オーストラリアでの Seggie, Fulmizi and Stewart (1982)、イギリスでの Strongman and Woosley (1967) と Cheyne (1970)、Giles (1970)、Giles and Powesland (1975)、Giles 他 (1975)、カナダでの Anisfeld, Bogo and Lambert (1962)、アメリカでの Markel, Eisler and Reese (1967)、台湾での Young, Huang, Ochoa and Kuhlman (1992) の何れの研究でも色々な場面でスタンダードなことばを使った話者の方がスタンダードでないことばを使った話者より社会的習性（例えば頭が良いなど）で高い評価を受けたり、社会的に地位が高いと思われる職業に向いていると評価されたりしている。

日本では井上が 1980 年に行った各地方言への評価意識の研究で同じような結果が出た。標準語に一番近いと認められている東京の方言（真田 1988、p.112）が他の地域方言より知的プラス評価を受けた。この研究の参加者は 7 つの大学に通っていた 550 人の大学生で、自分の話しことばを自己評価した。

⁴ 調査が行われた西オーストラリア州で言う四、七、九年生は年齢で言えばそれぞれ日本では小学校三年生、小学校六年生、中学校二年生のことである。

前述したように Giles 他 (1975) の研究では容認発音とバーミンガムアクセントがどう評価されたかが比較されたが、容認発音というのはイギリス英語の標準アクセントとされている。中世期のイギリスでは、ロンドンや東南イギリスに宮廷があったためそれらの地域のアクセントが他の変種より高く評価されるようになった。時間が経つにつれて、ロンドンで話されていたアクセントの特徴が少なくなり容認発音ができた。それが 19 世紀になってパブリック・スクールの影響で階級の高い人が話されるアクセントとされるようになった (Giles and Powesland 1975)。また、最近まで BBC 放送局の全てのアナウンサーが容認発音で話していたため、容認発音は「BBC 英語」とも呼ばれている (Trudgill 1974/1992)。

一方バーミンガムアクセントはバーミンガム地方で話されるアクセントであり、バーミンガムは産業革命の時からイギリス産業の中心地であった (Everitt 1985)。Giles 他 (1975) の研究で容認発音と比較するのにバーミンガムアクセントを選んだのは、Giles がそれより前、1970 年に行った研究で、ウェールズ南部の青年達の間でバーミンガムアクセントに対する信望性が容認発音や他の地域方言より低いと報告したからである。

Giles (1970) はイギリスでは使われたアクセントによって聞き手はその話し手に対して異なる信望をいだき、その信望の高さの度合によってアクセントのランキングがあるとしている。まず容認発音で話す人に対する信望が一番高く、次に信望が高いのは地方アクセントで話す人で、産業都市のアクセントで話す人に対する信望が一番低いということである。また、1993 年のロンドンのある新聞にも、地方アク

セントと比べ容認発音の方が耽美的であり、また、地方アクセントで話す人よりも容認発音で話す人の方が社会的習性において良い評価を受けると書かれている

(Coggle 1993)。また、Trudgill (1974/1992、p.11) によれば、バーミンガムアクセントは他の産業都市のアクセントと同じように「しばしば汚く、無頓着であって、不愉快なものと考えられている」ようである。

Giles 他 (1975) が研究で使った話者は容認発音とバーミンガムアクセントの両方で話せる 20 代半ばの男性であった。この話者が研究助手の女性と共にカーディフ大学の心理学部の教授として調査の参加者に紹介された。調査の参加者は全部で 56 人であり、それぞれ 28 人ずつの二つのグループに分けられた。各グループの 28 人は 16 歳から 18 歳までのウェールズ南部の高校生（つまり容認発音もバーミンガムアクセントも使わない人々）で、性別の内訳はそれぞれのグループ内で男性 19 人、女性 9 人であった。まず、前述した男性の話者が、きちんとした身なりで現れ、一つ目のグループの前で容認発音を使って、一分ぐらい心理学について話した。話の内容は心理学を勉強しに大学に入学しても、心理学に対するイメージと心理学の実体の違いから退学する学生もいるというものであった。その後心理学について知っていることやどうやって心理学について情報を得るかなどを書くように調査の参加者に頼んだ。その一分後、部屋を出て行った。四分後、研究助手の女性が参加者に心理学について書くのを止めて、さきほど話した男性を評価するアンケートに答えるように頼んだ。

このアンケートにはその男性が「頭が良い／頭が良くない」、「自信がある／自信がない」などの社会的習性の評価スケールと、「ユーモアがある／ユーモアがない」などの連带的習性の評価スケールが書かれていた。二つ目のグループに対しても全く同じ手順で調査が行われたが、今度はその男性の話者はこのグループに対しバーミンガムアクセントを使って話した。評価スケールの分析の結果、その男性はバーミンガムアクセントで話した時より容認発音で話した時の方が社会的習性の「頭が良い」の項目において高く評価された。他の社会的習性と連带的習性においては話者がバーミンガムアクセントで話した時も容認発音で話した時もほぼ同じように評価された。

1.3 日本語の標準語と大阪方言

1.3.1 日本語の標準語の定義

日本語でイギリス英語の容認発音に当たることばは何になるだろうか。一般的には標準語ということばが使われているようだ。真田（2000）によれば「標準語」ということばは明治時代に作られたもので、その時代の特徴として日本を統一するためでもあり、外国に向けて日本のことばを紹介するためでもあると述べている。田中章夫他（1996）も同じように「標準語」のルーツは明治時代にあると言っているが、この山の手ことばを中心とした「標準語」の定義に関する論議は大正の初期まで続いていたらしい。当時は「標準語」ということばよりむしろ、「普通語」とか「通用語」と呼ばれていたようである。

一方、日本語では共通語というものの存在は認めるが、標準語の存在は認めないという人もいるようである。田中章夫他（1996）は次のように述べている。

「国語学、方言学の立場からは、日本語には標準語はないという考え方があつた。日本語には、日本全国で共通に分かり合えることばが共通語としてあつたが、日本語の最も望ましいあつべき姿としてのことばを標準語と言うなら、そのようなことばはまだないというわけである。」
(田中章夫他、1996、p.8)

しかし、「標準語」の代わりに「共通語」を使うことに関して、反対の声もあるようである。「共通語」の本来の意味は「(略) 言語 (・言語変種) の構造ではなく、あくまでその機能や役割を指してのものである」(真田 2000、p.112) からである。このように通常は、現在標準語が存在しているという考え方の方が多いようなので、本研究も標準語の存在を認めることにする。また、現在の日本の標準語は東京の方言が広がつたことばを指すと考えられる。これは東京が文化、経済、政治の中心となつたからであり、それ以前は、文化の中心であつた京都のことばや、経済の中心であつた大阪のことばや、政治の中心であつた江戸のことばが、それぞれ標準語のような役割を果たしていた (田中春美他 1992)。

ただ、日本語の標準語は東京の方言が広がつたものではあつたが、東京出身の人でも日常生活の中でいつも標準語を使うわけではないようだ。佐藤 (1998) の研究で東京出身の人でも標準語と母方言を使い分けていることがわかる。他の地域方言と同じで東京の人が話していることばは東京方言である (田中章夫他 1996)。また、東京出身の人にとって「東京ことば」は標準語のベースの「山の手ことば」ではなく、「下町ことば」だそうである (田中章夫他 1996)。

1.3.2 標準語と大阪方言の特徴

東京の人と大阪の人の特色がよく比較されるように、東京と大阪で話されることば、すなわち標準語と大阪方言はよく比較される。

標準語と比べ、大阪方言は「荒い」(Taylor, Goncharoff, Florence and Rowthorn 1997) という見方をする人がいる。6世紀ぐらいから、大阪と神戸の港町は朝鮮半島と中国との商売の中心の場所であったので、大阪方言の荒さはこの貿易の港町と言う性格から来ていると言われる。また、大阪方言は活気が溢れるイメージがあるから、コメディアンになろうとする人が大阪で見習いをするぐらい、コメディでよく使われるようである (Taylor 他 1997)。

それに対して、田中春美他 (1992) は全く逆のことを言っている。彼らによると、東京方言は元気がよく、強い調子なのに比べ、大阪方言は柔らかく、商人的であるということである。また、田中春美他 (1992) と同じように、金田一 (1988) も東日本のことばに比べると関西弁⁵の方が柔らかいと言っている。金田一によれば、関東では、例えばよく「ツッぱねる」とか「ブッタぎる」などと言うし、「ベェベェ言葉」⁶も使われるので、関東方言は荒いと思われる。しかし同じ東日本でも、

⁵ 関西弁は「京阪神を中心とした近畿地方一円で用いられる方言の通称」(梅棹、金田一、坂倉、日野原 1997) であり、大阪方言はその一つである。

⁶ 「ベェベェ言葉」は東北地方や関東地方(東京都区内を除く)の方言で、この「ベェ」は推量を表す助動詞であると考えられる(真田 1988)。

東京では「ベェベェ言葉」が使われないので東京ことばはていねいであるとも述べている。

その他に大阪方言が柔らかいとする例として、大阪方言で話し相手に対して「あなた」や「きみ」などの2人称で呼ばず、「自分」や「われ」などの1人称で呼ぶことがあげられる。2人称の代わりに1人称を用いることにより思いやりを表していると言われる。つまり、「相手の立場に自分が立って、かわりにモノを言ってあげているというスタンス」（日本博学倶楽部 2000、p.43）だと解釈できる。

1.4 日本人のことばのバラエティーに対する印象

1.4.1 日本人の日本語のバラエティーに対する印象

前述したように「標準語」ということばが出てきたのは明治20年代⁷であるが、その頃から「標準語」が正しく、地域方言や標準でないアクセントが間違っているというような考え方があったようである。例えば伊澤（1909）は東京方言を使用する必要性だけでなく地方的方言をなくすべきだとさえ述べている。

また、戦前は教育においても標準語は「よいもの」とか「きれいなもの」とか「洗練されたもの」などと指導されたのに対して、方言は「悪いもの」とか「汚いもの」とか「かっこう悪いもの」などと指導されたのである（真田 2000）。真田（1988）

⁷ 明治20年代は1887年から1896年までである。

によると、大正5年（1916年）に国語調査委員会は標準語が東京の、教育を受けた人が話すことばであると次のように書いている。

「主トシテ今日東京ニ於テ専ラ教育アル人々ノ間ニ行ハル、口語」
（真田 1988, p.197）

ところが、標準語に対してマイナスの印象を持つ人々もいたようである。真田（2000）は日本語の標準語に対する印象の違いによって日本人が二つのグループに分けられていると言っている。この二つのグループはその人たちが教育を受けた時期が第二次大戦の前か後かで分けられている。真田は次のように述べている。

「戦前の教育を受けた人々は、『標準語』と聞くと、自分の母語を強制的に押さえつけたもの、という暗いイメージが体験的にあつて、『標準語』と聞いただけでミリタリズムを彷彿とさせるということもあるわけである」（真田 2000、p.9）。

反対に、真田（2000）によれば、戦前教育を受けた人々の標準語に対する暗いイメージと違って、戦後教育を受けた人々の標準語に対するイメージは比較的良い。戦後「標準語」の代わりに「共通語」ということばが出てきて、一般にも使われるようになったが、「共通語」が広まった理由の一つは統制のようなイメージが消えたからだと言っている。

日本の各地の方言が標準語化している（野元 1988）ことも人々が母方言よりも標準語の方に良い印象を持っていることの裏づけかもしれない。国立国語研究所が

山形県の鶴岡市で行った研究は標準語化の証拠の一つである。その研究では、まず 1950 年に調査参加者に 31 の単語を発音してもらってその発音が標準語的か方言的かを判定した。そして 1971 年に鶴岡市で行った全く同じ研究と比較したところ、結果が大幅に違った。全体的にどの年齢層でも標準語化していることが明らかになったのである。

1.4.2 日本人の英語のバラエティーに対する印象

日本人は自分の国以外のことばのバラエティーに対しても異なる印象を持っているようである。例えば、英語に関しても日本で標準だとされているアメリカの英語が正しく、他の変種が間違っていると思っている人が大勢いるようである。例えば、杉本（1988）は日本ではアメリカの英語が英語の標準語だと信じて、本人が別に英語がわからなくても他の国の英語を見下す日本人が多いと述べている。同様に、1999 年の朝日新聞には、アメリカ以外の国、特にオーストラリアの英語は望ましくないと思っている日本人が多いという記事が載っていた。英字紙の求人欄にアメリカ人やカナダ人やイギリス人が望ましいと条件をつける英会話学校が少なくないようであった（朝日新聞 1999）。

1.5 本研究

本研究は日本でスタンダードなことば、つまり標準語を話す人とスタンダードでないことば、つまり本研究の場合大阪方言を話す人がどう評価されるかを調べたものである。研究課題として：(1) Giles 他（1975）、Strongman and Woosley（1967）、

Cheyne (1970) 等の研究と同じように日本でも標準語を話す人の社会的習性がより高く評価され、連带的習性が大阪方言を話す人より低く評価されるかどうか、また、(2) Lambert 他 (1960) と同じように、話者と同じバラエティーで話す人にも話者と違うバラエティーで話す人にも、スタンダードなことばで話す話者が社会的習性においても連带的習性においても、高く評価されるかどうか、を調べたい。

本研究は Giles 他 (1975) 年の研究に基づいたものだが、Giles 他 (1975) とはいくつかの違いがある。まず、Giles 他 (1975) の研究ではイギリス英語のバラエティーの二つ、つまり容認発音とバーミンガムアクセントに対する印象の違いを調べたが、普段その二つのどちらのアクセントでも話さない人たちに印象を聞いた。それに対し本研究では標準語と大阪方言についての印象を、二つのアクセントのどちらかを話す人、つまり、全国で標準語に最も近い (真田 1988、p.112) 東京の人たちと関西の中心の大阪の人たちに印象を聞いた。また、Giles 他 (1975) の研究では参加者の各グループは一つのアクセントしか聞いていなかったが、本研究では各グループ、つまり大阪出身参加者と東京出身参加者が、大阪方言話者と標準語話者の両方によって録音された伝言を聞いてそれぞれの印象についてのアンケートに答えてもらうことにした。次に Giles 他 (1975) は MGT を用いたが、本研究では同じ話者が二つのバラエティーを話すのではなく、二つのバラエティー、つまり標準語と大阪方言をそれぞれ母方言とする 2 人の話者を使うことになった。それから Giles 他 (1975) で話者が容認発音で話した時もバーミンガムアクセントで話した時も、参加者が話者の話について書いたコメントのワード数と、話者に関して書いたコメントのワード数が数えられ、分析されたが、本研究では話者に対する印象は評価スケールのみで分析した。また調査参加者の年齢も少し異なっている。Giles

他（1975）の研究では16歳から18歳までの高校生で平均年齢が17歳6ヶ月であった。しかし本研究では、最終的に調査参加者の年齢は19歳から30歳までとなり、参加者の平均年齢は23.6歳であった。

これらの修正を加えた調査方法については次章で詳しく述べたい。

第二章

調査方法

第2章は調査方法についてである。まず調査の参加者について述べ、続いて本研究で用いた調査のデザインとアンケートで使った評価スケール、又調査に使った伝言の録音について説明し、最後に2人の話者について述べる。

2.1 調査の参加者

当初、この調査の参加者にはオーストラリアのパース市在住の日本人で、年齢が20歳から34歳までの東京生まれで東京育ち⁸の男女を5人ずつ、大阪生まれで大阪育ち⁹の男女を5人ずつ、合計20人探すつもりであった。なぜ20歳から34歳までの人を参加者として使うことにしたかという、オーストラリア観光協会によれば (Australian Tourism Commission 2000) オーストラリアに在住している日本人の中でその年齢層の人口が一番人口が多いということだったからである。そこで募集広告

⁸ 本研究では「東京生まれで東京育ち」と言うのは「日本にいた時東京にしか住んでいなかった」ということである。

⁹ 本研究では「大阪生まれで大阪育ち」と言うのは「日本にいた時大阪にしか住んでいなかった」ということである。

(付録 A p.45)を作り、パース市内にある、日本人向けの旅行会社など、20 歳から 34 歳までの日本人がよく行くようなところに張らせてもらった。

しかし、実際に参加者を探しはじめたら、純粹の「東京生まれで東京育ち」と「大阪生まれで大阪育ち」の人を 10 人ずつ探し出すのは難しく、結局「埼玉生まれで埼玉育ち」の女性 1 人と、「兵庫県生まれで兵庫県育ち」の女性 1 人にも参加してもらうことになった。真田（1988）の標準語形分布率の全国順位によると、標準語形の平均分布率の全国 1 位は東京で 61.6%であるが 2 位は隣の埼玉県で 60.8%であるので、この埼玉の女性も標準語が話せると判断し、参加してもらうことにしたのである。同様に兵庫県は大阪府の隣県であることからこの兵庫の女性も大阪方言に近いことばを話すと考えたのである。また、人数の関係で年齢が少しはずれるが、19 歳の大阪の女性にも参加してもらうことにした。最終的には大阪出身参加者の平均年齢は 22.9 歳で、東京出身参加者は 24.3 歳となった。（付録 B 表(1)、p.46 参照）

2.2 調査のデザイン

調査の参加者は全員、二つのタスクを行った。タスク 1 は留守番電話に入っている大阪方言の伝言を聞き、その大阪方言話者に関するアンケートに答えるものであった。タスク 2 は標準語で話された、タスク 1 と同じ内容の伝言を聞き、その標準語で話した話者に関するアンケートに答えるものであった。各グループの参加者はまず、普段自分の使っているアクセントの伝言を聞き、その後、使っていない方のアクセントの伝言を聞く、という順番でテープを聞いた。表 1 は東京出身者と大阪

出身者、それぞれのタスクの順番を表している。

表 1

調査のデザイン

組	タスクの順番	男性	女性
東京出身参加者	タスク 2⇒タスク 1	5 人	5 人
大阪出身参加者	タスク 1⇒タスク 2	5 人	5 人

2.3 アンケートに使った評価スケール

この研究では Anderson (1985) に従い、14 の習性に関して、それぞれ 1 点から 7 点のポイントが示された評価スケールが入っているアンケート（付録 C、pp. 47-49 参照）を使った。この 14 の習性は話者に対する印象を表したもので、社会的習性と連带的習性の 2 つのカテゴリーに七つずつ分けられている。また、その評価スケールの 1 点は「その通りだと思う」で、7 点は「全く違う」で、参加者はそれぞれの習性に同意する度合について答えた。たとえば「頭が良い」という習性については 1 点は最も肯定的な意味を持ち、7 点は最も否定的な意味を持っている。しかし「話すのが下手」という習性については 1 点は最も否定的な意味を持ち、7 点は最も肯定的意味を持っている。「フォーマル」に関しては 1 点は「とてもフォーマルだ」の意味を持ち、7 点は「とてもインフォーマルだ」、または「全くフォーマルではない」の意味を持っている。それぞれの習性は表 2 にまとめた。

表 2

評価スケールに使われた習性

社会的習性	各習性
	頭が良い
	出世する
	自信がある
	学がある
	話すのが下手
	勤勉だ
	やる気がある
連帯的習性	信頼できる
	冷たい
	友好的だ
	フォーマル
	誠実だ
	協力的だ
	面白い

(Anderson 1985、筆者訳)

2.4 調査手順に使った伝言の録音

調査にはテープレコーダーと二つの留守番電話の伝言が入っているテープを使った。

当初は、調査者が自分でテープを作成するのではなく、関西外国語大学の教科書（1998、p.21）に入っている日本語会話のテープをそのまま使うつもりであった。そのテープには男女の大学生2人による会話が二つあり、大学の宿題についてそれぞれ標準語と大阪方言で話されたものであった。しかし、本研究のアンケート調査に参加してくれる人は話者の習性に関して答えなければならないので、このテープを使った場合、2人の話者のうちどちらについて答えるかが問題になるだろうと気がついた。例えば、もし調査の参加者が1人の話者は頭が良さそうだがもう1人の話者は頭が良さそうではないと思った場合に、どう答えたら良いか、複雑になるので、このテープは使わないことにした。

次に、Giles 他（1975）の MGT を使った研究のように標準語と大阪方言の両方が話せる1人の話者を使おうとして探したが、標準語も大阪方言も話せる人は見つからなかった。そこで標準語を話す人と大阪方言を話す人の2人を話者として使わざるを得なくなり、声が似ている2人の人を探し、録音をたのんだ。第一章で述べたように Giles（1970）の研究では MGT を用いて、13 種のことばのバラエティーをウェールズ南部出身とサマーセット出身の12歳と17歳の生徒たちに評価させたが、容認発音が信望性が一番高く、バーミンガムアクセントが一番低いという結果を得ている。その研究の翌年も同じような研究がイギリス各地の21歳の大学生を調査

参加者にして行われた（Giles 1971）が、この研究では MGT が用いられなかった。しかし、信望性の順位は 1970 年の研究結果と大体同じという結果が出ているので本研究でも MGT を使わなくても意味のある結果が得られるのではないかと考えた。

テープに録音した留守番電話の伝言は若い女の人が親しい友達と遊びに行く予定を中止したいという内容である（付録 D、pp. 50-51 を参照）。この内容であれば、社会的習性と連带的習性のどちらにも偏りがないと思われた。約 1 分の長さの伝言を作成し、東京出身と大阪出身の人に間違いがないかチェックしてもらい、調査に使った。

2.5 話者

テープで標準語を話してもらった話者は栃木県生まれで、大学に入るまで栃木県に住んでいた女性である。データ収集当時、彼女は 26 歳であった。大阪の大学に通っていた 4 年間だけは大阪に住んでいたが、大学を卒業してからは 4 年間東京に住んでいたので通算 22 年間は関東地方に住んでいたことになる。Payne (1980) のアクセントに関しての研究では、あるアクセントをマスターするには 6 歳までにそのアクセントで話しはじめなければならないという結果が出ている。生まれてから 18 歳まで関東に住んでいた話者に標準語アクセントができないはずはないと考えた。また、真田 (1988、p.112) の標準語形分布率の全国順位によると、標準語形の平均分布率は全国 1 位は東京で 61.6%であるが 3 位は栃木県で 60.7%である。この

数字を見ると、栃木の人は東京とだいたい同じぐらいに標準語を話すことが明らかであるため、この話者に標準語話者として録音をしてもらった。

大阪方言を話してもらった話者は生まれてからデータ収集2週間前までずっと大阪に住んでいた。データ収集当時、23歳の女性である。

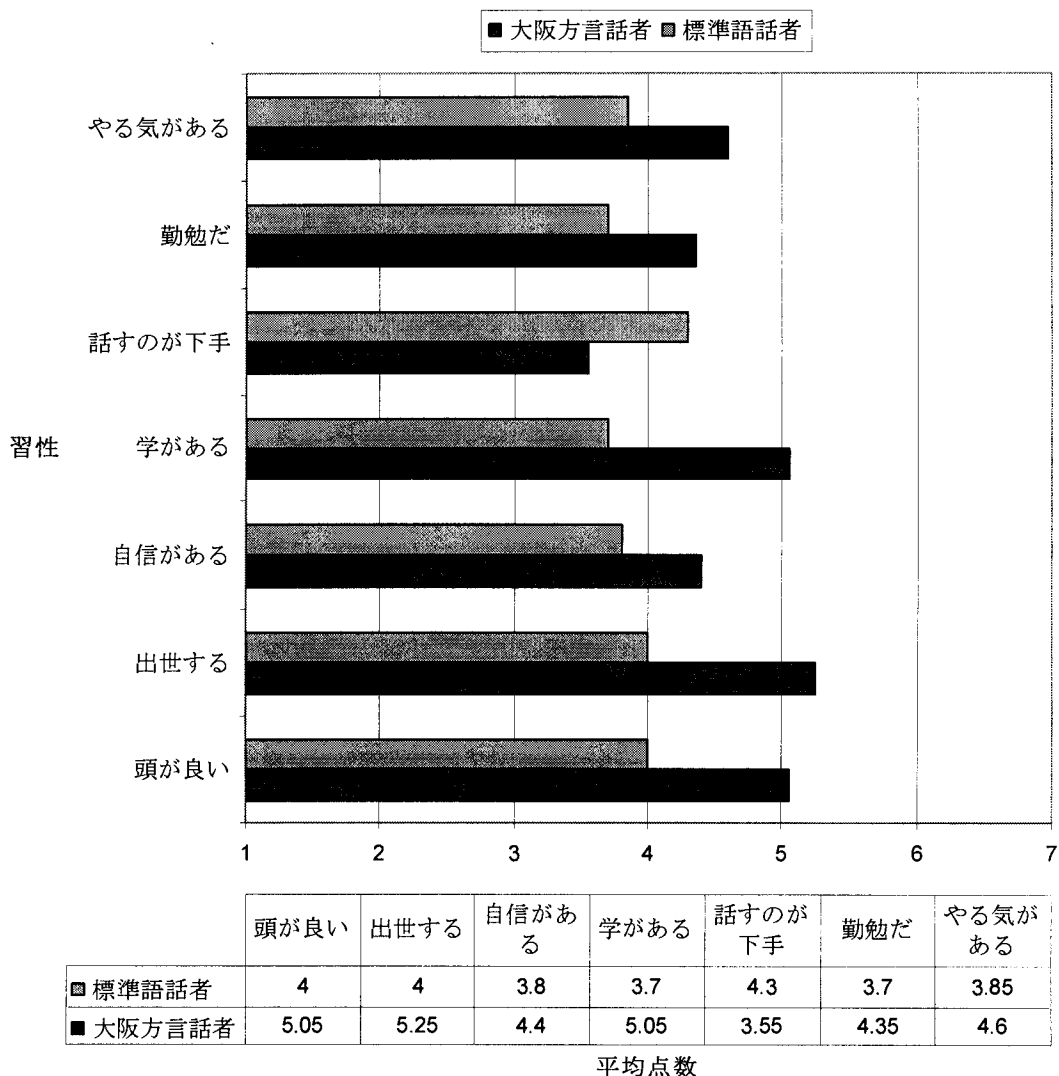
第三章

結果と考察

第三章では調査の結果と考察を報告する。まず、参加者全体の標準語と大阪方言に対する印象についての結果を報告し、次に標準語と大阪方言に対する大阪出身参加者と東京出身参加者の印象の相違を分析して報告し、その後、考察を試みる。

3.1 結果 (1) ー参加者全体の標準語話者と大阪方言話者に対する印象

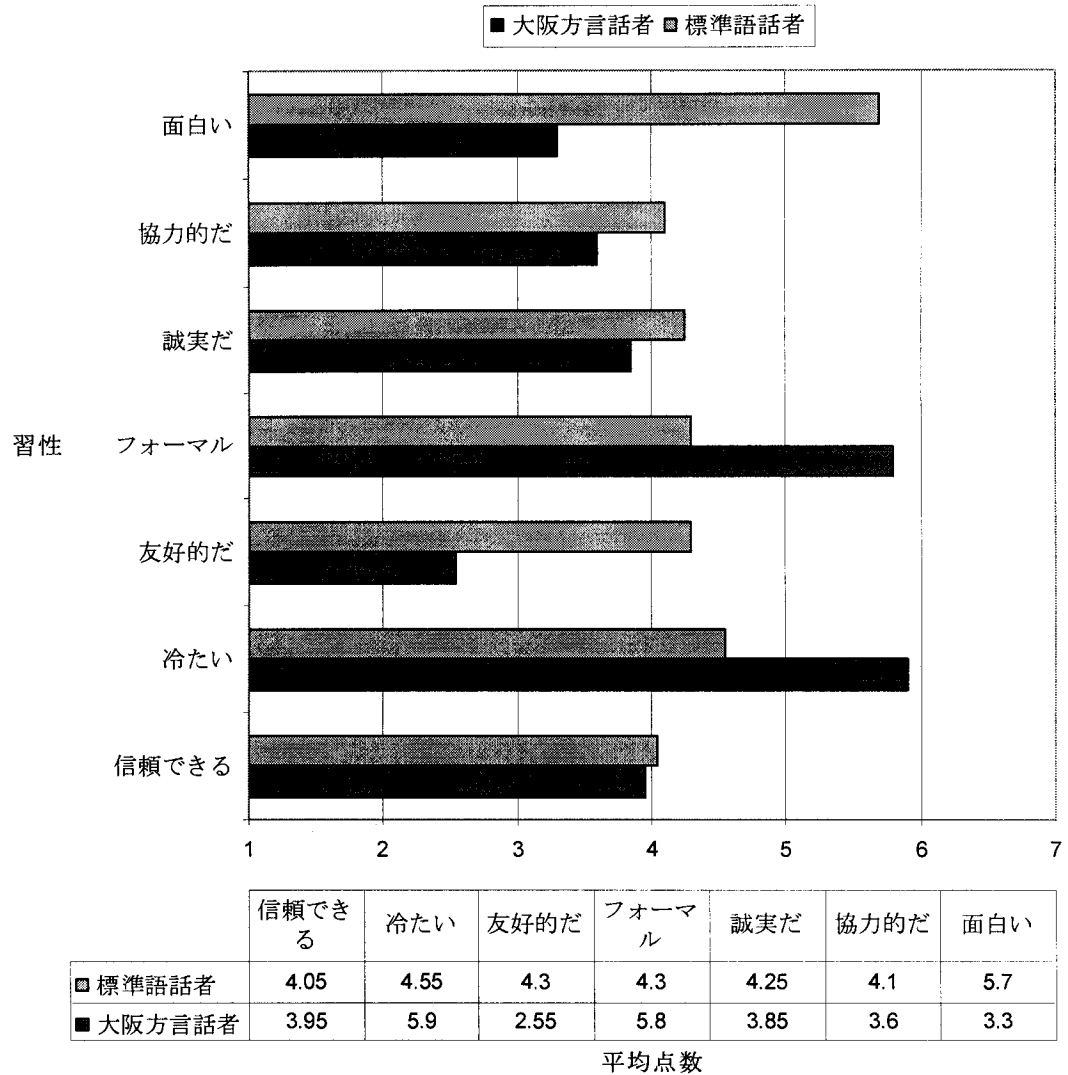
結果を社会的習性と連帶的習性に分けて図表で表した。まず、社会的習性を見てみる（図表 1、p.28）。Giles 他（1975）では、話者はイギリスの容認発音で話した時には「頭が良い」の項目だけ、バーミンガムアクセントで話した時より高く評価され、他の項目ではどちらの発音でも印象は同じだったが、本研究では社会的習性のいずれの項目においても、日本のスタンダードなことば、つまり標準語話者に対する評価が、スタンダードではないことば、つまり大阪方言話者に対する評価よりも高かった。七つの習性のうち 2 人の話者に対する評価スケールで差がそれほど大きくなかった習性は四つ（やる気がある、勤勉だ、話すのが下手、自信がある）で、他の三つの習性（学がある、出世する、頭が良い）では差がやや大きかった。



図表 1 参加者全体の標準語話者と大阪方言話者の社会的習性に対する印象

次に図表 2 (p.29) は参加者全体の標準語話者と大阪方言話者に対する印象の連带的習性に関する結果を表している。Giles 他 (1975) の研究では連带的習性においては話者が容認発音で話した時もバーミンガムアクセントで話した時も同じように評価されたが、本研究では連带的習性では全体的に大阪方言話者の方が高く評価された。これは Strongman and Woosley (1967) と Cheyne (1970) の調査結果と同じであった。しかし「信頼できる」、「誠実だ」、「協力的だ」の項

目では大阪方言話者の方が高く評価されたとは言え、その差はあまり大きくない。それに対して残りの四つの項目で大きい差が見られた。まず、「面白い」の習性で標準語話者があまり面白くないと評価されたに比べ、全部の習性の中で最も大きな差で大阪方言話者の方が面白いと評価された。残りの習性（フォーマル、友好的だ、冷たい）でも大きな差で大阪方言話者の方が高く評価された。つまり、大阪方言話者の方がインフォーマルであり、友好的であり、冷たくないと評価された。



図表 2 参加者全体の標準語話者と大阪方言話者の連带的習性に対する印象

3.2 結果 (2) ー参加者の出身別による標準語話者と大阪方言話者に対する印象の相違

大阪出身参加者と東京出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象を別々に見るために、ここでは社会的習性と連带的習性は同じ図表に入れ、参加者の出身別による結果を表した。大阪出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象を図表 3 にまとめ、東京出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象を図表 4 にまとめている。

図表 3 (p.33) と図表 4 (p.34) を比べて全体的に見ると Lambert 他 (1960) で英語話者が英語圏参加者にもフランス語圏参加者にも高く評価されたのと同じように標準語話者が大阪出身参加者にも東京出身参加者にも高く評価された習性は 14 項目のうち、「フォーマル」、「やる気がある」、「勤勉だ」、「学がある」、「自信がある」、「出世する」、「頭が良い」の 7 つであった。逆に、Lambert (1967) の結果と違って、大阪方言話者が両グループに高く評価された項目は「面白い」、「協力的だ」、「誠実だ」、「友好的だ」、「冷たい」の 5 つで、2 人の話者に対する印象が分かれた項目は「信頼できる」と「話すのが下手」の 2 つであった。

もう少し詳しく見てみると 14 の習性のうち、2 人の話者に対する印象が大阪出身参加者も東京出身参加者も同じパターンで、評価スケールの差も同じぐらいの項目は「面白い」、「協力的だ」、「友好的だ」、「自信がある」の 4 つであった。これらの項目において、大阪出身参加者も東京出身参加者も標準語話者の方を高く評価したのは「自信がある」の項目で、大阪方言話者の方を高く評価したのは「面白い」、「協

力的だ」、「友好的だ」の3つの項目である。

大阪出身参加者も東京出身参加者も2人の話者を同じように評価しているが、評価の度合に差があるのは「フォーマル」、「冷たい」、「やる気がある」、「勤勉だ」、「学がある」、「出世する」、「頭が良い」であった。例えば一番差があったのは「フォーマル」の項目である。東京出身参加者の印象のみで出した結果では2人の話者に対する印象に差がほとんどなかったのに対し、大阪出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象の差は目立って大きく、標準語話者の方をフォーマルだと評価した。前述したように参加者全体を使った分析では「フォーマル」の項目で大きい差が見られたが、東京出身参加者が標準語話者も大阪方言話者も同じくらいフォーマルだという印象を持ったのとは対照的に大阪出身参加者は母方言話者よりも標準語話者の方がずっとフォーマルだと思ったことになる。

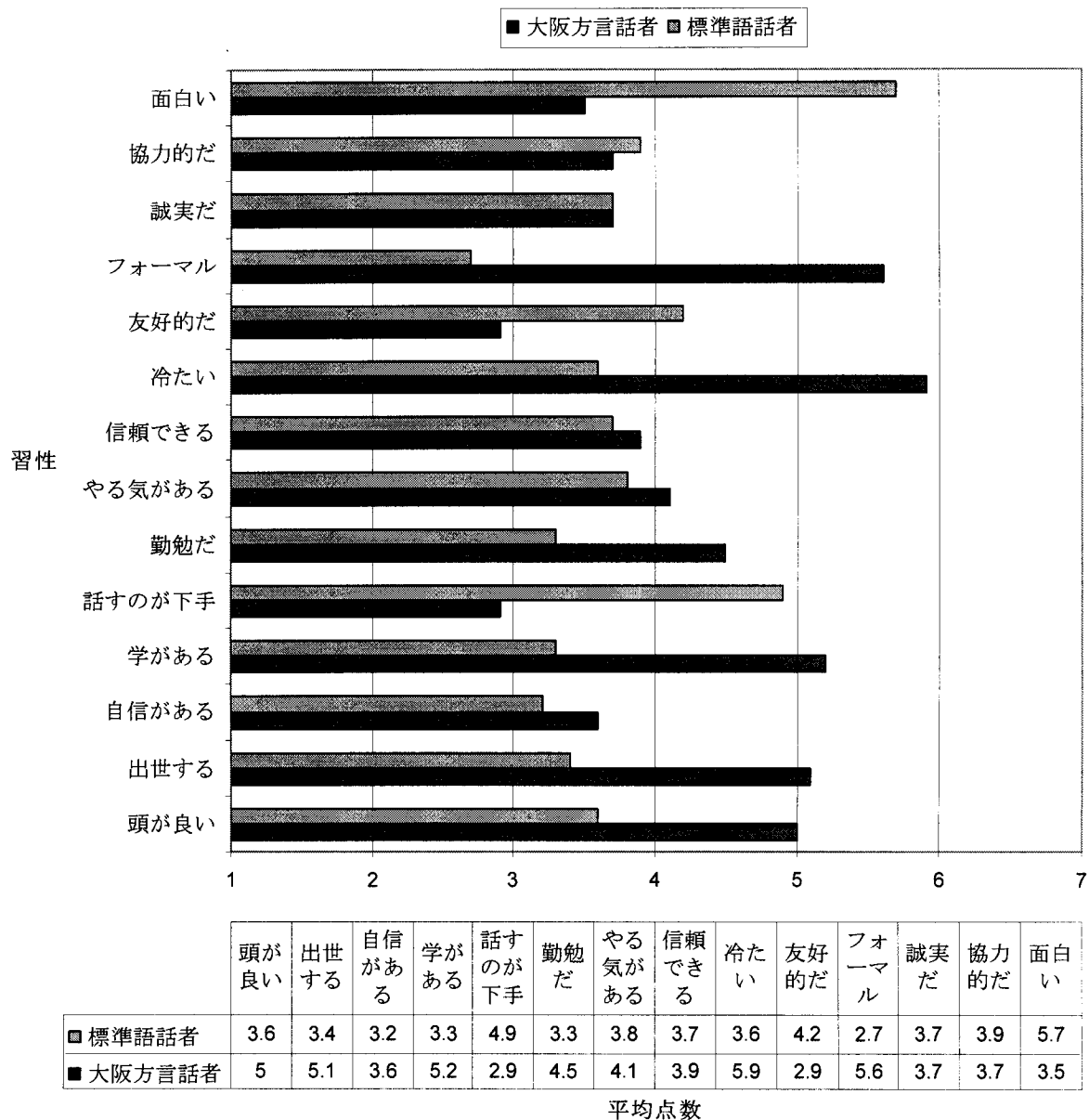
同じように「冷たい」の項目でも東京出身参加者は大阪方言話者より標準語話者の方が冷たいと評価したとは言え、その差は非常に小さい。それに対して大阪出身参加者の2人の話者に対する評価には大きな差があり、標準語話者の方が冷たいと評価した。

他にも、大阪出身参加者は4つの社会的習性、「頭が良い」、「出世する」、「学がある」、「勤勉だ」でかなり大きな差で母方言話者である大阪方言話者に対して低く評価し、標準語話者を高く評価した。東京出身参加者も同じように、「頭が良い」、「出世する」、「学がある」で標準語話者の方を高く評価したが、その差はそれほど大きくない。逆に、「やる気がある」の項目では大阪出身参加者が母方言話者であ

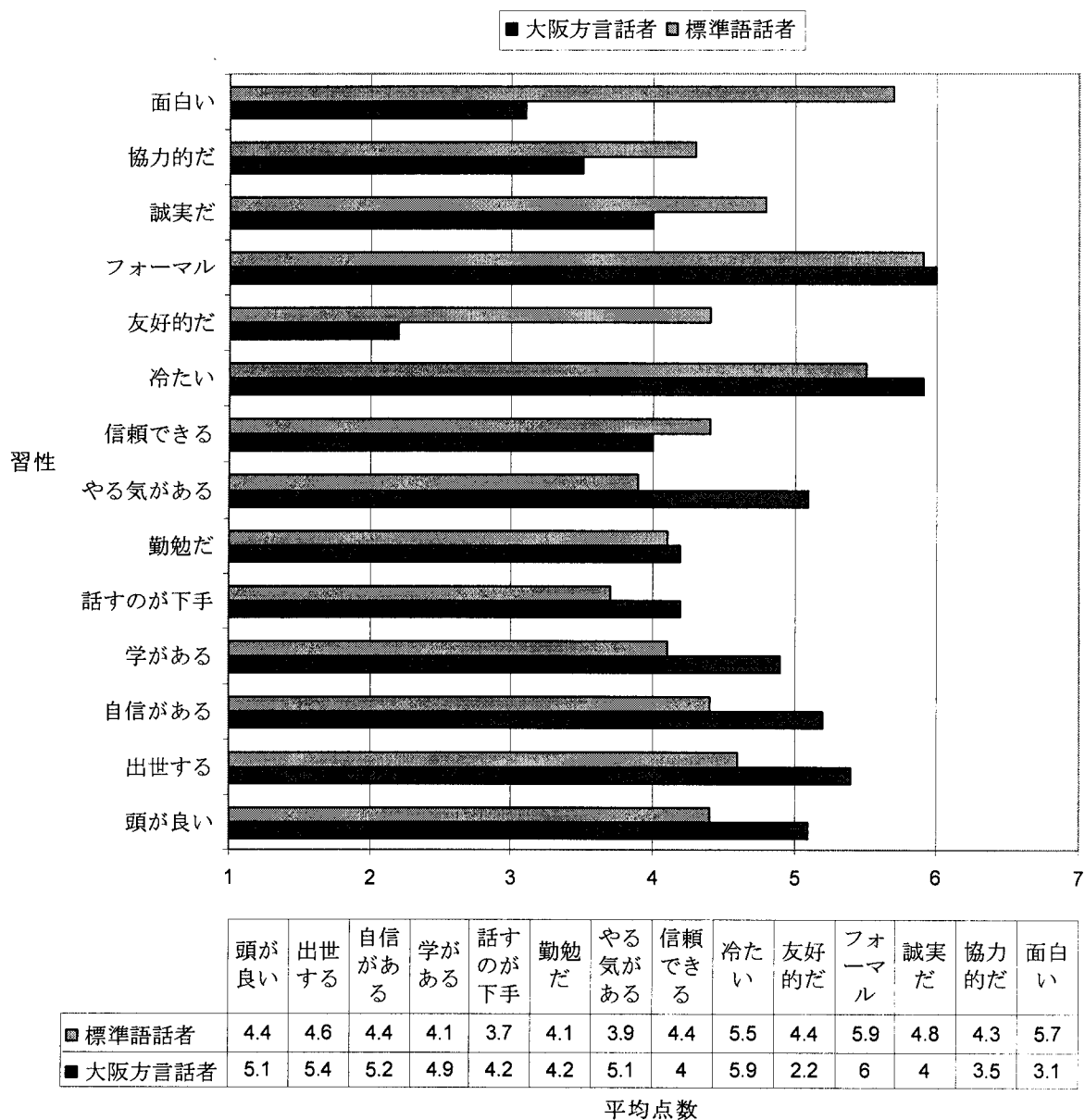
る大阪方言話者に対して低く評価し、標準語話者を高く評価したが、その差はそれほど大きくない。東京出身参加者も同じように、標準語話者の方を高く評価したが、その差は大きい。

また、出身別による各グループの結果が分かれたのは「信頼できる」と「話すのが下手」の項目である。どちらのグループも2人の話者に対する評価の差は少ないが、大阪出身参加者は標準語話者の方を高く評価し、東京出身参加者は大阪方言話者の方を高く評価した。つまり、大阪出身参加者は標準語話者の方が信頼できるという印象を持ったが、東京出身参加者は大阪方言話者の方が信頼できるという印象を持った。そして「話すのが下手」の項目でも両方のグループが母方言ではない話者の方を高く評価した。つまり、大阪出身参加者も母方言話者よりも標準語話者の方が話すのが上手だと評価し、東京出身参加者も、大阪出身参加者ほどではないにしても、母方言話者より大阪方言話者の方が話すのが上手だと評価した。つまり、大阪出身参加者は大阪方言話者の方が話すのが下手だという印象を持ったが、東京出身参加者は標準語話者の方が話すのが下手だという印象を持ったことになる。

「誠実だ」の項目については大阪出身参加者の両話者に対する印象は全く同じであった。それに対して東京出身参加者は大阪方言話者の方が誠実だと評価したが、2人の話者に対する印象の評価スケールには差がなかった。



図表 3 大阪出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象



図表 4 東京出身参加者の標準語話者と大阪方言話者に対する印象

3.3 考察

参加者全体の結果を見れば社会的習性においては標準語話者に対する印象はより高く評価され、連带的習性においては大阪方言話者に対する印象はより高く評価

される傾向があったことがわかる。参加者の出身別で分析しても「フォーマル」、「信頼できる」、「話すのが下手」の項目を除けば同じ傾向がある。ここでいくつかの項目について考察を試みたい。

まず「面白い」の項目を見てみる。参加者全体において大きな差で大阪方言話者の方が面白いと評価され、出身別で見ても大阪出身参加者も東京出身参加者も同じように大きな差で大阪方言話者の方が面白いと評価した。前述した Taylor 他（1997、p.15 参照）が大阪方言はコメディでよく使われていると述べたのもこの「面白い」の習性から来ていると言える。他の文献からも同じような意見が出されている。例えば、お笑いタレントで有名な吉本興業の代表の木村政雄氏は最近の大阪方言に対する印象の変化について、コメディアン・明石家さんまなどが使う大阪方言が、大阪方言を話さない人々の大阪方言に対する印象を「面白い人間のイメージ」に変えたと言っている（朝日新聞 2001 年 2 月 21 日）。この理由で本研究でも標準語話者より大阪方言話者の方が面白いと評価されたのではないだろうか。

また、「冷たい」と「友好的」の項目では参加者全体に大阪方言話者の方が冷たくなく、友好的だと評価された。朝日新聞の記事（2001 年 2 月 3 日）には、方言は友好的で暖かさがあると書かれている。更に日本博学倶楽部（2000、p.82）によれば若者は標準語よりも大阪方言の方に「温かみを感じ」、普段標準語も大阪方言も使わない九州の人でも大阪方言の方が親しみやすいと思っているようである。本研究でも同じような結果が出たと言える。また、参加者の出身別で分析しても大阪出身参加者も東京出身参加者も標準語話者の方が冷たいと評価しているが、大阪出身参

加者の2人の話者に対する評価の差が大きいということは東京出身参加者が標準語話者を冷たいと感じるより、大阪出身参加者の方が標準語話者に対してずっと強く冷たいと感じたということではないだろうか。

「フォーマル」の項目に関して参加者全体は大きな差で標準語話者の方がフォーマルだと評価した。参加者の出身別で分析すると、大阪出身参加者も東京出身参加者も標準語話者の方がフォーマルだと評価しているがその評価の度合に差がかなりあった。大阪出身参加者は大きな差で標準語話者の方がずっとフォーマルだと評価したのに対し、東京出身参加者は2人の話者に対する印象に差がほとんどなかった。佐藤（1998）は日本の14の地域に住んでいる人々が色々な場面で、いつ共通語（つまり、本研究で言う標準語）を使い、いつ母方言を使うかを調べた。大阪出身者による評価のデータはないが、隣府の京都出身者の結果によれば、地元では京都方言話者の知人と話す場合回答者のわずか8%しか共通語を使わなかったのに対し、東京の電車の中では、京都方言話者の知人とも母方言を使わず共通語を使う人が20.7%となり、更に東京で共通語を話す見知らぬ人に道を尋ねる時、共通語を使う割合が56.6%となった。このことから京都では標準語がフォーマルな場合で使うことばだと思っている人がかなりいるのではないであろうか。隣府の大阪出身者にも同じような傾向があるかもしれない。本研究で標準語話者が大阪出身参加者にフォーマルだと高く評価されたのは同じ理由ではないだろうか。

しかし、本研究で大阪出身参加者の2人の話者に対する印象が「フォーマル」の項目においてなぜ東京出身参加者の印象とこれほど違ったかについては「フォーマル」ということばをどのようにとらえたかということと関係があるかもしれない。

肯定的に、つまり「きちんとしている」の意味でとらえたのか、否定的に、つまり「気楽さがない」、「堅苦しい」の意味でとらえたのかははっきりしない。

第四章

終わりに

本研究の目的は Giles 他（1975）の研究のように日本の標準語と地域方言である大阪方言がそれらのアクセントで話す人と話さない人にどう評価されるかを調べて比較することであった。第四章では、まず本研究のまとめを述べ、その後本研究の問題点と今後の課題について述べたい。

4.1 まとめ

本研究は Giles 他（1975）に基づいて、日本人の日本語のバラエティーに対する印象を調べた。留守番電話のメッセージをそれぞれ標準語と大阪方言で話した2人の話者が東京出身の参加者10人と大阪出身の参加者10人、それぞれ男女5人ずつに色々な社会的習性と連帶的習性、合計14項目において評価された。

研究課題は次の二つであった。(1) Giles 他(1975)、Strongman and Woosley(1967)、Cheyne(1970)等の研究と同じように日本でも標準語を話す人の社会的習性がより高く評価され、連帶的習性が大阪方言を話す人より低く評価されるかどうか、また、(2) Lambert 他(1960)と同じように、話者と同じバラエティーで話す人にも話者と

違うバラエティーで話すに人も、スタンダードなことばで話す話者が社会的習性と、連帶的習性の両方において、高く評価されるかどうかということであった。

調査の結果、日本語においても Giles 他 (1975)、Strongman and Woosley (1967)、Cheyne (1970) 等と同じようにスタンダードなことば、つまり本研究の場合標準語話者の方が社会的習性においては高く評価され、連帶的習性においては低く評価されたという結果が得られた。

また、Lambert 他 (1960) の研究では、社会的習性においても、連帶的習性においても英語圏参加者とフランス語圏参加者両方に全体的に英語話者の方が高く評価されたが、本研究でも大阪出身参加者も東京出身参加者も標準語話者を社会的習性に関しては全て高く評価した。しかし、連帶的習性では大阪方言話者の方が高く評価され、Lambert 他 (1960) の結果とは違いが見られた。

4.2 本研究の問題点と今後の課題

本研究は、Giles 他 (1975) の調査法に基づいて、日本語のスタンダードなことば、つまり標準語とスタンダードではないことば、つまり大阪方言に関する印象を調べた。その結果、Giles 他 (1975)、Strongman and Woosley (1967)、Cheyne (1970) 等の研究と同じように本研究でも社会的習性において標準語話者は高く評価され、連帶的習性において大阪方言話者は高く評価される傾向があることがわかった。しかし、本研究では参加者の人数は少なく、また分析に統計処理も行っていない。今後の研究では大人数の参加者を対象として同じ研究を行う必要があると思う。また、

本研究では標準語と大阪方言に対する印象だけを比較したが、同じ方法で日本の各地の色々な方言に対する印象を調べれば Giles 他（1970）のようなアクセントのランキング（p.11 参照）が明らかになり、面白いのではないかと思われる。

調査方法の問題点として本研究の評価スケールに入っている連带的習性の一つの「フォーマル」ということばが参加者によってとらえ方が違ったかもしれないということがある。アンケートの中で、参加者にどういう風に「フォーマル」ということばを使っているかを詳しく説明するか、あるいは使わないことにすれば不明なところがなくなったのではないかと考えられる。また、Giles 他（1975）の研究では話者は男性であったが、本研究では女性の話者を使った。もし男性の話者を使っていたら結果は変わっていたかもしれない。話者の性によって結果が変わる可能性もあるので、その点を考慮に入れてさらなる研究を行う必要があるだろう。

参考文献

- Anderson, E.A. (1985). *Language Attitudes: Perspectives for the Language Teacher*. RELC, Singapore.
- Anisfeld, M., Bogo, N., & Lambert, W. (1962). Evaluation reactions to accented English speech. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol. 65, No. 4, 223-231.
- Australian Tourism Commission. (2000). *Profile: Your guide to marketing in Japan*. Woolloomooloo : AGPS.
- Cheyne, W. (1970). Stereotyped reactions to speakers with Scottish and English regional accents. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 77-79.
- Coggle, P. (1993). *Between Cockney and the Queen*. The Sunday Times - London, Wordpower Supplement.
- Everitt, A. (1985). *Landscape and Community in England* The Hambledon Press.
- Giles, H. (1970). Evaluative reactions to accents. *Educational Review*. 22, 211-227.
- Giles, H. (1971). Speech Patterns in Social Interaction: Accent Evaluation and Accent Change. Unpublished doctoral dissertation. University of Bristol. In "*Speech Style and Social Evaluation*". Giles, H., & Powesland, P.F. (1975).
- Giles, H., Baker, S., & Fielding, G. (1975). Communication length as a behavioral index of accent prejudice. *International Journal of the Sociology of Language*, 6, 73-81.
- Giles, H., & Powesland, P.F. (1975). *Speech Style and Social Evaluation*. Academic Press, European Social Psychology Monograph Series.
- Haig, Y., & Oliver, R. (2003). Is it a case of mind over matter? Influences on teachers' judgements of student speech. *Australian Review of Applied Linguistics*, Vol. 26, No 1, 55-70.
- Lambert, W., Hodgson, R., Gardner, R., & Fillenbaum, S. (1960). Evaluation reactions to spoken languages. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 60, 44-51.

- Lieberson, S. (1970). *Language and Ethnic Relations in Canada*. Wiley, New York.
- Markel, N., Eisler, R., & Reese, H. (1967). Judging personality from dialect. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 6, 33-35.
- Payne, A. (1980). Factors controlling the acquisition of the Philadelphia dialect by out-of-state children. In Labov, W (ed.) *Locating language in time and space*, pp. 143-78. Academic Press, New York.
- Seggie, I., Fulmizi, C., & Stewart, J. (1982). Evaluations of personality traits and employment suitability based on various Australian accents. *Australian Journal of Psychology*, Vol. 34, No. 3, 345-357.
- Strongman, K., & Woosley, J. (1967). Stereotyped reactions to regional accents. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 6, 164-167.
- Taylor, C., Goncharoff, N., Florence, M., & Rowthorn, C. (1997). *Lonely Planet: Japan*. Lonely Planet Publications.
- Trudgill, P. (1992). *Sociolinguistics: An Introduction* (土田滋訳). Penguin Books Ltd. (Original work published 1974)
- Young, R., Huang, S., Ochoa, A., & Kuhlman, N. (1992). Language attitudes in Taiwan. *International Journal of the Sociology of Language*, 98, 5-14.
- 伊澤修二 (1909) 「視話応用東北発音矯正法」 楽石社
- 梅棹忠夫、金田一春彦、坂倉篤義、日野原重明 (1997) 「日本語大辞典」 講談社
- 江川清 (1987) 「地域社会の言語生活研究小史」 高橋太郎編『新・日本語講座』 5。日本人の言語生活。汐文社。23-40
- 関西外国語大学 (1998) 「日本語会話四」
- 金田一春彦 (1988) 「日本語の特質」 日本放送出版協会
- 佐藤和之 (1998) 「共生する方言と共通語—地域社会が求める使い分け行動」、月刊言語

- 真田真治 (1988) 「標準語の成立事情」 PHP 研究所
- 真田真治 (2000) 「脱・標準語の時代」 小学館
- 杉本良夫 (1988) 「進化しない日本人へ」、情報センター出版局
- 田中章夫、清水康行、秋永一枝、鮎澤孝子、シュテファン・カイザー、磯村尚徳他 (1996) 「東京語のゆくえ」、東京堂出版
- 田中春美、樋口時弘、家村睦夫、五十嵐康男、倉又浩一、中村完他 (1992) 「言語学のすすめ」、大修館書店
- 日本博学倶楽部 (2000) 「こんなに違う！「関東」と「関西」おもしろ比較読本」 PHP 文庫
- 野元菊雄 (1988) 「日本人の言語行動 第4節 年齢」 NAFL Institute (日本語教師養成通信講座)。アルク
- 古屋則子 (1999) 「日－英コードスイッチング (Attitudes Toward Japanese－English Code Switching)」文化女子大学 第7集 文化女子大学 人文・社会科学研究 in Iamphongsai, S. (n.d.) 文献リスト. Retrieved 7 April, 2005, from <http://www.george24.com/~sirikatt/references.htm>
- 朝日新聞 (1999年3月12日) 「英語に国境ないはず」
- 朝日新聞 (2001年2月3日) 「お国自慢に花咲かそう」
- 朝日新聞 (2001年2月21日) 「目立つで関西系なんでやねん」

募集広告

至急募集

方言の調査に参加してくださる方、いませんか。

私はエディス コーワン大学の4年生で方言に関しての論文を書く為に研究をしています。この研究はエディス コーワン大学によって承認されたもので日本人が日本語をどう思っているかを調べています。20歳から34歳までの関東生まれ、関東育ちの方と関西生まれ、関西育ちの方を十人ずつ探しています。この調査は四月に行う予定です。

調査に参加してくださる方にはご都合のいい時、ご都合のいい場所でカセットテープに録音された日本語の会話を聞いて、日本語で簡単なアンケートに答えていただきます。調査は十分で終わります。論文には名前や各個人の回答は書きません。

調査に参加してくださる方は下にお名前と電話番号を書いて下さい。又は私に連絡して下さい。アンケート及び、研究に関して質問がありましたら、私、スティーブ バムステッド (Steve Bumstead) まで連絡して下さい。

電話 : (08) 9446—5558

携帯電話 : 0401 093 454 (オプタス)

よろしくお願い致します。

Steve Bumstead

スティーブ バムステッド

エディス コーワン大学国際文化地域学科 (日本語) 4年

_____	_____
_____	_____
_____	_____
_____	_____

付録 B 表（1）

調査参加者の背景

番号	性別	年齢	生まれ / 育ち
1	女性	20	東京
2	女性	29	東京
3	女性	23	東京
4	女性	21	東京
5	女性	26	埼玉
6	女性	19	大阪
7	女性	26	大阪
8	女性	21	大阪
9	女性	21	大阪
10	女性	20	兵庫
11	男性	30	東京
12	男性	24	東京
13	男性	23	東京
14	男性	23	東京
15	男性	24	東京
16	男性	20	大阪
17	男性	28	大阪
18	男性	27	大阪
19	男性	24	大阪
20	男性	23	大阪

方言に関する調査

テープをお聞きになって、それぞれの話者に関してご自分のご感想に最も近い番号に○を付けて下さい。話の内容に関するの感想ではありません。

「全くその通りだ」と思う場合は、1に○を付けて下さい。

「全く違う」と思う場合は、7に○を付けて下さい。

その他の同意度の場合は1と7の間の適当と思われる番号に○を付けて下さい。

会話 1 の話者に関して

	←大 (その通りだと思う)			同意度		小→ (全く違う)	
頭が良い	1	2	3	4	5	6	7
出世する	1	2	3	4	5	6	7
自信がある	1	2	3	4	5	6	7
学がある	1	2	3	4	5	6	7
話すのが下手	1	2	3	4	5	6	7
勤勉だ	1	2	3	4	5	6	7
やる気がある	1	2	3	4	5	6	7
信頼できる	1	2	3	4	5	6	7
冷たい	1	2	3	4	5	6	7
友好的だ	1	2	3	4	5	6	7
フォーマル	1	2	3	4	5	6	7
誠実だ	1	2	3	4	5	6	7
協力的だ	1	2	3	4	5	6	7
面白い	1	2	3	4	5	6	7

会話 2 の話者に関して

	←大 (その通りだと思う)			同意度		小→ (全く違う)	
頭が良い	1	2	3	4	5	6	7
出世する	1	2	3	4	5	6	7
自信がある	1	2	3	4	5	6	7
学がある	1	2	3	4	5	6	7
話すのが下手	1	2	3	4	5	6	7
勤勉だ	1	2	3	4	5	6	7
やる気がある	1	2	3	4	5	6	7
信頼できる	1	2	3	4	5	6	7
冷たい	1	2	3	4	5	6	7
友好的だ	1	2	3	4	5	6	7
フォーマル	1	2	3	4	5	6	7
誠実だ	1	2	3	4	5	6	7
協力的だ	1	2	3	4	5	6	7
面白い	1	2	3	4	5	6	7

付録 D

調査に使った伝言

大阪方言での伝言

ともちゃん。あゆむやけど今日クラブに行くはずやってんやんな。でも行けへんくなっちゃたんやんか。今たかしとけんかしてるから行っても楽しくないしあまり行きたくないわ。たかしってめっちゃうるさい。行くなとか行く理由がないやんとか彼氏もいるやんとか言うねん。むかつくやんな。それに宿題がめっちゃあるから今度にしいひん。そうそう日本よりこっちの方が宿題多いやんな。しかも難しいよな。もうちょっと頑張らな。オーストラリアってのんびりできるとこやと思ってたけどやっぱり大学はちゃうわ。でもめっちゃ大変やけどほんまに来てよかったわ。街めっちゃきれいやし住みやすくていいよな。また家に帰ったら電話してくれへん。じゃねバイバイ。

標準語での伝言

ともちゃん。あゆむだけど今日クラブに行くはずだったよね。でも行けなくなっちゃったんだ。たかしとけんかしてて、行っても楽しくないからあまり行きたくないの。たかしってまじでうるさい。行くなとか行く理由がないじゃんとか彼氏もいるだろうとか言うんだ。超まじむかつく。それに宿題がたくさんあるし、今度にしない。そうそう日本よりこっちの方が宿題多くない。しかも難しいよね。もうちょっとがんばんなきゃ。オーストラリアってのんびりできるとこだと思ってたのにやっぱり大学は違うんだよね。でも大変だけど本当に来てよかったよね。街がすごく

きれいだし、住みやすいよね。じゃあ、うちに帰ったら電話して。じゃまたね、バイバイ。